

ホラティウス『カルミナ』1.1におけるプリアメル
—— lyricus vates の視座 ——

河島思朗

はじめに

ホラティウス『カルミナ』全4巻のうち第1巻～第3巻は紀元前23年に同時に、あるいは前26年～23年頃に1巻ずつ刊行された¹。いずれにせよ第1巻はひとつのまとまった詩集として編まれている。その第1巻第1歌では、詩人がサッポーやアルカイオスを模範として抒情詩を作ることを宣言している。一般的に詩集の最初の歌は詩の性質をあきらかにすることを意図しており、詩集全体を理解するうえで重要な歌であると考えられるだろう。

しかしながら、第1歌(全36行)の内容理解については、先行研究の解釈が大きく分かれている。第1歌の構造については以下のとおりである。最初の2行でマエケナスへと呼びかける(Maecenas, atavis edite regibus/ o et praesidium et dulce decus meum: 「マエケナスよ、王族の祖先から生まれし者よ、おお、わたしの庇護者、敬愛する誉れ高き者よ」1-2²)。次いで、3行から34行がプリアメルを構成する。そして最後の2行で再びマエケナスへの語りと抒情詩人であることへの祈願が語られる(quod si me lyricis vatibus inseres, / sublimi feriam sidera vertice. 「そしてもしもあなたが私のことを、抒情詩人に加えてくださるなら、私は高くもたげた頭で星々を打つことになるだろう」35-36)。すなわち、マエケナスへの呼びかけがリングコンポジション(枠構造)として全体を枠づけ、プリアメルがあいだに挟まれる構造を有している。このように第1歌はプリアメル部分(3-34行)が詩の中心に位置づけられ、プリアメルの詩とみなしうるような構造を有しているにもかかわらず、この部分について解釈が分かれ、活発な議論がなされている。

本稿は『カルミナ』第1巻第1歌のプリアメル部分を詳細に分析することで、第1歌の新たな理解を提示することを目指している。

* 高橋宏幸教授の退職を記念して、本稿を先生に献呈いたします。高橋先生にはオウィディウス研究においてたびたび助言をいただきました。また京都大学文学研究科西洋古典学専修で同僚となつてからは、いっそうご指導ご鞭撻を賜ることになりました。心より感謝申し上げます。また先生のますますのご活躍をお祈りいたしております。

¹ Hutchinson, pp.171-97.

² テキストは Shackleton Bailey の校訂版を使用、日本語は拙訳。

1. プリアメル

「プリアメル」(priamel) はもっとも主張したいこと(「主題」)を強調するために、いくつかの事柄を列挙して対比させる修辞技法である。たとえば、「AもBもCも素晴らしいが、何よりもDがもっとも素晴らしい」というように、A, B, Cを比較対象としてDを強調する。Dが「主題」(climax/cap)であり、A, B, CはDの「引き立て役」(foil)となる。

第1歌の場合には、さまざまな人の喜びが引き立て役となる(3-28)。すなわち、オリュンピアでの戦車競走の勝利(①3-6)、公職への就任(②7-8)、大量の穀物の獲得(③9-10)、畑の耕作(④11-14)、航海による貿易(⑤15-18)、酒や閑暇(⑥19-22)、戦場(⑦23-25)、狩(⑧25-28)の8種類の喜びが列挙される³。そのあとで、主題となる詩人自身の喜びが語られる。それは、世俗から離れ、抒情詩人として詩歌を作ることであるという(⑨29-34)。またこのように喜びは各人の職業と結びついていることから、抒情詩人も含めて「職業のカタログ」を構成していると理解することができる⁴。

3-34行にプリアメルの技法が用いられていることは、研究者によって同意されている。典型的なプリアメルの構造といってもよいかもしれない。しかしながら、詩作の喜びが引き立て役となる他の職業よりも優れていると理解すべきか、それとも同列に置かれているか、という点について解釈が分かれている。2世紀頃のPomponius Porphyrioが第1歌のプリアメルに関して、引き立て役と主題は同列であると示唆したことから、伝統的には同等であると考えられていた。しかしMusurillo, p.235はこのプリアメルを職業のカタログと理解したうえで、詩人が他の職業に勝っていると結論付けた⁵。Nisbet, p.1, Race, pp.122-23, West, p.6などはMusurilloの解釈を継承している。

一方で、Meyerはプリアメルにおいて引き立て役が必ずしも否定的に語られない、主題に劣らない例を示しながら(*Sermones*, 2.1.24-28⁶)、第1歌のプリアメルがPorphyrioの指摘するように同列に語られていると解している。また岩崎, p.61-62は倫理的な価値判断をおこなわず、並列されているだけであるとしながらも、他の人々とは一線を画した高みに詩人は位置づけられていると解する。

『カルミナ』1.1のカタログに描かれる職業の多くは、他の歌においても描かれており、多くのばあい否定的に語られている。たとえば*Sermones* 1.1には『カルミナ』1.1と共通

³ 8つの引き立て役に関して、分かりやすいように①～⑧と番号をつけた。

⁴ プリアメルとカタログの関係については、cf. Race, p.25.

⁵ プリアメルの解釈の変遷については、Meyer, pp.61-63に詳しい。

⁶ とりわけ27-28行では「生きている人の数と同じ数だけ、熱中の対象は何千もある」(quot capitum vivunt, totidem studiorum / milia)が、自分(me, 28)は詩作を喜びとする、と語る。この箇所でもプリアメルが用いられているが、執心する事柄を列挙する引き立て役は、主題と並列に語られると解されている(Meyer, pp.61-63)。

する人々が描かれており、その職に就く人々の貪欲な生き方が否定される。この点について、一方の研究者は *Sermones* においてはこれらの職業があからさまに否定されているのに対して、『カルミナ』においては否定されていないことを、引き立て役と主題が並列に置かれている根拠のひとつにあげる。他方で、否定的な要素を見出そうとする研究者は *Sermones* との類比を根拠として、『カルミナ』1.1 の引き立て役も否定されており、詩人が勝っていると解する。このように、他の詩との類比から異なる結論が導き出されうることから、本稿では他の詩との比較を議論の中心とはせず、この詩そのものの理解を深めることを目的とする⁷。

本稿は第1歌のプリアメルを細かく分析することで、「引き立て役」(他の職業)と主題(詩人)が同列に語られていないことを明らかにする。ただし、このプリアメルは主題が引き立て役に勝っていることを示す役割を果たすのみならず、従来の研究が指摘する以上に、巧みな対比と連関を有することで、主題の性質を、とりわけ *lyricus vates* (35) の性質を明示する意図があることを議論したい。

2. 引き立て役の分析

プリアメルは基本的には引き立て役と比較して、主題となる事柄を強調する修辞技法であると理解できる。その引き立て役は一般的に素晴らしいと考えられるものであり、それ以上に主題は素晴らしいものとなる。第1歌においては、8種類の「喜び」あるいは「職業」が引き立て役となる。以下では、プリアメルの引き立て役を細かく分析してみたい。

3-10行では3種類の職業に就く人が列挙され、各人を喜ばせる (*iuvat*, 4) 事柄が語られる。

- ① *sunt quos curriculo pulverem Olympicum
collegisse iuvat, metaque fervidis
evitata rotis palmaque nobilis* 5
terrarum dominos evehit ad deos;
- ② *hunc, si mobilium turba Quiritium
certat tergemis tollere honoribus ;*
- ③ *illum, si proprio condidit horreo
quidquid de Libycis verritur areis;* 10

⁷ 本稿では議論しないが、ホラティウスは内戦や貪欲さに対して一貫して批判的な態度を有していると、さまざまな詩を通じて見出すことができるだろう。

- ①ある者たちは、戦車でオリュンピアの砂塵を巻きあげることを
喜ぶ。熱をおびた車輪で折り返し地点の
柱をかわし、栄光の棕櫚を獲得すれば 5
彼らは地上の覇者として、神々にまで高められる。
- ②ある者は喜ぶ、移り気な市民の群衆が
競って、彼を3つの官職へと持ちあげるなら。
- ③ある者は喜ぶ、リビアの脱穀場から掃き集められたものが
すべてみずからの穀物倉庫に納まるなら。 10

最初に語られるのはオリュンピアの戦車競走選手の喜びだ(①)。戦いに勝利すれば名誉ある栄光を獲得し、「地上の覇者として、神々にまで高められる」(6)という⁸。二番目は公職者だ(②)。順調に政治的成功をおさめれば「3つの官職」(8)、すなわち按察官、法務官を経て、最高職の執政官にいたる進路を上ることができる。三番目は小麦を取引する裕福な農場経営者だ(③)。自らの穀物倉庫にリビアの小麦粉が大量に集まれば喜ぶ。最初の3つの喜びはセットで語られており、「栄誉・権力・富」への渴望と言い換えることができるだろう。3つが結びついていることは、行頭の *sunt quos* (3), *hunc* (7), *illum* (9) という詩的な構造によっても表されている。

この箇所で「移り気な市民の群衆」(*mobiliū turba Quiritium*, 7) と描写されることは重要である。「移り気な」という形容には明らかに否定的な意図が込められているだろう。政治家の成功は日和見的な民衆の動向に左右されるものであり、政治的権力には危うさが潜んでいる。穀物倉庫の描写にもまた否定的な要素が含まれる。リビアのすべての穀物を得ることは不可能であるし、一粒も残さずに「掃き集められた」(*verritur*, 10) という表現からは農場経営者の過分な欲望と食欲さが感じ取られる。そのように考えると、戦車競走選手の喜びにも危うさが看取されるだろう。猛スピードで砂塵を巻きあげ、熱をおびた車輪で折り返し地点の柱をかわして、やっと勝利を手にすることができる。危険を冒すことが栄誉の条件であるし、危険そのものを喜びとしているように思われる。

栄誉・権力・富は一般的に人々が得たいと求めるものだろう。引き立て役にふさわしい対象だといえる。しかしその描写には、あからさまではないけれども否定的なニュアンスが込められている⁹。すなわち、栄誉を獲得するための「危険」、民衆の支持に左右される権力の「不安定」、富を求める「食欲」という要素が含まれている。

⁸ 引き立て役の最初に戦車競走選手が挙げられていることは、West が指摘するように、ピンダロスの祝勝歌を思い起こさせるものであり (p.6)、抒情詩人を志すホラティウスが意図的に配置したものであろう。

⁹ 先行研究が指摘するように、この3要素はつねにホラティウスが攻撃する対象でもある。

次いで語られるのは農夫だ (11-14).

④gaudentem patrios findere sarculo
agros Attalicis condicionibus
numquam demoveas, ut trabe Cypria
Myrtoum pavidus nauta secet mare ;

④父祖の畑を鋤で耕すことを喜ぶ者なら
アッタロス王の申し出であっても、
あなたは引き離すことはできないだろう、キュプロスの船で
水夫となっておののきながらミュルトス海に分け入るようにと。

農夫は父祖伝来の畑を耕すことに喜びをみいだす。たとえ貧しかったとしても十分に満足している。巨額の富をローマに遺贈したペルガモン王アッタロス三世の申し出があったとしても、農夫から水夫になるように、その生き方を変えることはできない。水夫はキュプロスの船で遠く離れたギリシアのミュルトス海を「おののきながら」(pavidus, 14) 進む。小さな土地に根差した生き方とは相対する生き方だ。

この農夫の生き方は、先に語られた農場経営者 (③) と対比される。貪欲な経営者とは反対に、小さな土地であったとしても満足して、自らが生きるための糧を得ることに喜びを見出す。貪欲さから離れた喜びであるといえよう。このように、引き立て役として提示される職業のカタログは、やみくもに列挙されているのではない。①②③がセットとして考えることができたように、農夫 (④) は経営者 (③) との対比的な性質を有しているために導入されている。また農夫の描写のなかに登場する水夫の恐怖は、航海の危険や不安定さに由来するものであり、次に登場する貿易商 (⑤) へとつづく要素と結びついている。カタログに登場する職業と喜びは個々に独立しているのではなく、相互に関連を有しているのである。

また、最初の3つ (①②③) については、喜びとなる事柄が主語であり、それが人々を「喜ばせ」(iuvat, 4) ていた。しかし農夫 (④) の場合には、耕作を「喜ぶ者」(gaudentem, 11) の生き方は変えることができない、という主題が語られる。視点が「喜びとなる対象」(榮譽・権力・富) から「生き方」に移行している。もちろん、競技者や政治家や農場経営者においても対象となる欲望を描くことで、その欲望へと向かうそれぞれの生き方が暗示されていた。しかし、この視点の移り変わりが意図的に「生き方」に焦点をあてようとしていることには着目すべきだろう。

同様に、農夫の描写において「あなたは引き離すことはできないだろう」(numquam demoveas, 13) という2人称の呼びかけを用いていることも、「生き方」への注意喚起を

促している。この2人称は一般的な人々や読者を示すような表現と受け止めることもできるが、同時に最初の行で呼びかけられたマエケナスへの呼びかけとも理解できる。たとえどれほどの富を積んだとしても、堅実な農夫の生き方を変えることはできない。危険に身をゆだねる水夫にすることはできない。そのようにマエケナスに訴えている。

農夫に次いで、カタログの5番目に語られるのは貿易商の生き方である。

⑤ *luctantem Icaris fluctibus Africum* 15
mercator metuens otium et oppidi
laudat rura sui, mox reficit rates
quassas, indocilis pauperiem pati ;

⑤ 貿易商は、イカロスの海波に抗う南西風を 15
恐れているあいだには、閑暇と地元の町にある
田園を褒めそやすが、すぐに傷ついた船を
修理する、簡素な暮らしに耐えることを学ばずに。

貿易商はエーゲ海の東方にあるイカロスの海（イカリヤ海）で、強い風をうけながら航海する。先述の水夫の描写に含まれた「おののきながら」（*pavidus*, 14）と対応するように、航海は恐れ（*metuens*, 16）を抱くような危険なものとみなされている。また激しい波に揺さぶられて「傷ついた船」（*rates quassas*, 17-18）という表現からも、航海が危険であり、天候に身をゆだねるような不安定な性質のものであることが分かる。

そのように海を「恐れているあいだ」（16）には「閑暇」（*otium*, 16）と「田園」（*rura*, 17）を賞賛するが、船出の季節になればまたすぐに旅にでる。「簡素な暮らし」（*pauperiem*, 18）とは農夫のように田園で堅実に働き、閑暇を享受するような生き方だ。貿易商はそれを「学ばずに」（*indocilis*, 18）いる。「学ばずに」という形容には否定的なニュアンスが含まれるだろう。

とりわけ閑暇を享受することはローマにおいて重要な価値観だった。「閑暇」*otium* はたんに「仕事」（*negotium*）と対比されるばかりでなく、同じくらい充実したものとすることが幸せな人生においては不可欠のものとなされていた¹⁰。またウェルギリウス『牧歌』において牧歌の世界で歌を奏でながら暮らすことが *otium* であるとみなされているように（1.6）、*otium* とは平穏に生きることを意味していた。都会の喧騒と対比されるような田舎で質素に暮らす生き方や空間とも結びついていた¹¹。ホラティウスの詩のなか

¹⁰ Cf. Cicero, *De Oratore* 1.1.

¹¹ Fantham, p.71-72.

にも、このような *otium* の価値観は通底している。貿易商が閑暇に身を置いて暮らす生き方を学ばずにいる姿には、自らの仕事を愛する姿勢にとどまらない意味が込められている。

この貿易商の生き方と対比されて、カタログの6番目に「閑暇を楽しむ生き方」が語られる。葡萄酒を飲むことを楽しむ人だ。

⑥ *est qui nec veteris pocula Massici
nec partem solido demere de die* 20
*spernit, nunc viridi membra sub arbuto
stratus, nunc ad aquae lene caput sacrae;*

⑥ マッシクス産の古酒の盃を、
また日中から一部を割くことを、 20
さげすまない者もいる、あるときには青々と茂る苺の木のしたで
あるときには神聖な水の穏やかな源のそばで、手足を伸ばしながら。

この人物については、職業は語られない。「日中から一部を割くこと」(*partem solido demere de die*, 20)とは午後の休憩時間、いわゆるシエスタを意味しているから、何らかの仕事をしているのだろう。しかしその人は、昼間からのんびり酒を楽しんでいる。これまでの描写とは異なり、職業が語られていないのは、農夫からつづく「生き方」の観点が強くとれた結果といえる。どのような仕事であれ、「閑暇を楽しむ生き方」というものが提示されているのである。

また、このような人物がくつろぐ「青々と茂る苺の木のした」(*viridi sub arbuto*, 21)や「神聖な水の穏やかな源のそば」(*ad aquae lene caput sacrae*, 22)は、詩作にふさわしい場を思い起こさせる。たとえばウェルギリウス『牧歌』では、牧人が泉のそばや苺の木の下の歌をうたう牧歌的な情景が語られる¹²。閑暇を楽しむ酒好きの生き方は、詩人に親しみ深い情景と結びついている。のんびりとした平和な情景と言ってもよいかもしい。

このような酒好きの人の生き方と対置されるように、カタログの7番目と8番目に兵士と狩人の喜びが語られる(23-28)。この2人の描写では、事柄が主語となり人々を「喜ばせる」(*iuvant*, 23)。4行の *iuvant* と同じ動詞が用いられていることは意図的だろう。ま

¹² 「若むした泉よ、眠りよりも柔らかい草よ、まばらな陰で君たちを覆う青々と茂る苺の木よ」(*Muscosi fontes, et somno mollior herba, / et quae uos rara uiridis tegit arbutus umbra*, 7.46)。とくに泉については、cf. Dunn, pp100ff.

たこれまで列挙されてきた人々は行頭から描写が始まり、区切りが明確に示されてきた。ところが、兵士の描写の最後は25行へと句をまたぎ、行の途中から狩人が語られる。この詩的構造によって、兵士と狩人が対の関係にあると理解される。

⑦ multos castra iuvant et lituo tubae
permixtus sonitus bellaque matribus
detestata; ⑧ manet sub Iove frigido 25
venator tenerae coniugis immemor,
seu visa est catulis cerva fidelibus
seu rupit teretes Marsus aper plagas.

⑦陣営が多くの人々には喜ばしい、そして角笛に混ざった
ラッパの音が、母親たちに憎まれる
戦争が。⑧狩人は、冷たい空のしたに 25
うら若い妻のことなど忘れてとどまる、
もしも忠実な猟犬たちの目に鹿が捕らえられたならば、
もしもマルシーの猪がきめ細かい網を破ったならば。

兵士は平和な「閑暇」(otium)を愛する志向とは反対に戦争を好む。彼らには陣営や騎兵の角笛に混ざった歩兵のラッパの音が喜ばしい。ただし、戦争は母親たちに「憎まれる」(detestata, 24)べきものだ。兵士の生き方には明らかに否定的なニュアンスが込められている。

また、戦いを好む性質を「多くの者」(multos, 23)が有していると語られることは、他の職業のカタログにはない要素であるから重要であろう。憎まれるべき戦争を多くの者が喜びと感ずる。それは時代背景との関連を想起させる。オクタウィアヌスは紀元前27年に「アウグストゥス」の称号を得た。後代に定められた歴史区分からいえば「ローマの平和」時代に差し掛かった時期であるが、いまだ不安定な情勢にあり、内乱の爪痕の深い時代だった。したがって、兵士の喜びには内乱への批判が含まれていると考えることができる。

詩的構造によって密接に結びつけられている狩人の生き方にも、同様に否定的な表現が含まれる。狩人は「うら若い妻のことなど忘れて」(tenerae coniugis immemor, 26) 猟に心を奪われている。兵士と狩人は喜びを求めることで母と妻を悲しませるのである。また狩人の生き方は「青々と茂る苺の木の下」(viridi sub arbuto, 21)でくつろぐ酒好きと対比される。のどかな閑暇に反する危険で好戦的な生き方が「冷たい空(ユピテル)の下」(sub Iove frigido, 25)にとどまる情景のなかに描き出される。また危険を経て初め

レスボス島の豎琴を奏でるのを厭わなければ。

詩人であることを喜びとする「私」のことを「学識ある額への褒賞としてキズタの冠が天上の神々と交わらせる」(doctarum hederæ præmia frontium / dis miscent superis, 29-30) という。「学識ある」(doctarum¹⁴)は、ピンドロスが「詩の技術」を示すために用いる σοφία に対応する言葉であり、カトゥルルスやその後の詩人たちが受容したような「熟練した詩の技術」を表す文学用語である¹⁵。また「キズタの冠」(hederæ, 29)は詩人に靈感を与えるバックスと関連をもち、軽やかなジャンルの詩を指し示す¹⁶。抒情詩人であることを志すホラティウスにとってふさわしい「褒賞」(præmia, 29)であるといえよう。

だが同時に「学識ある」(doctarum)という表現には、簡素な生活に耐えるすべを「学ぶことのない」(indocilis, 18)貿易商人(⑤)との対比が含まれている。貿易商人は「閑暇」(otium, 16)や「田園」(rura, 17)を享受することなく、質素な生き方に喜びを見出すことはなかった。それはキズタの冠に喜びを見出し、質素に生きる詩人の生き方と相対するものだ。また、貿易商人の生き方と対照的に描かれたのは、富に目もくれず愚直に農園で生きる「農夫」(④)と閑暇を楽しむ「酒好きの人」(⑥)だった。富に関心を持たないことは、「林」(nemus, 30)のなかに暮らすことに喜びを感じる詩人の生き方にも当てはまる。この観点には富を喜びとして貪欲に求める農場経営者(③)との対比も含意される。そして酒好きの人がくつろぐ泉や木陰は詩作の場を思い起こさせるものだった。酒神バックスに靈感を得てキズタの冠を被る詩人もまた、酒との結びつきを有する。詩人は閑暇を享受する人物、詩作の世界に生きる者として描かれている。

またキズタが「褒賞」(29)として詩人に与えられることは、オリュンピアの「戦車競走選手」(①)と関連する。戦車競走選手が求める「栄光の棕櫚」(palmaque nobilis, 5)は、勝利の褒賞として与えられるものであり、勝者の名誉の証であった¹⁷。その棕櫚を手にしたときには、「地上の覇者として神々にまで高められる」(terrarum dominos evehit ad deos, 6)。勝利をたたえられ、熱狂する観戦者たちによって神々のように扱われたとしても、結局は地上を抜け出すことはできない。「神々にまで高められる」とは誇張された比喩表現でしかない。しかし詩人がキズタの冠を得るときには、詩の靈感を与えてくれる「天上の神々と交わる」(dis miscent superis, 30)ことができる。この「神々と交わる」という表現について、Musurillo, p.238は詩人の神格化であると理解している。しかし詩作

¹⁴ 名詞は doctrina.

¹⁵ Fordyce, p.178.

¹⁶ Nisbet, p.13, Mayer, p.59, 河島 (2017) p.22-23.

¹⁷ Nisbet, p.6.

することが詩神の息吹を感じ取ってはじめてなしえることであると解するならば¹⁸、この表現は神格化ではなく、むしろ詩人となること、詩作することを意味していると考えられる。そして、じっさいに神々と触れ合う詩人と戦車競走選手の決定的な差が描き出されているのである¹⁹。

そのように神話的情景に身を置く詩人のことを、涼しい林とニンフの軽やかな歌舞が「世俗から引き離す」(secernunt populo, 32) という。「民衆」とも訳しうる *populo* は「移り気な市民の群衆」(mobilium turba Quiritium, 7) と本質的に同じ意味の言葉である²⁰。移り気な人々の動向に一喜一憂しながら、公職の階段を上ることを目指す政治家 (②) とは正反対の生き方を、詩人は喜びとしている。そのような世俗から距離を置いたところに詩人は位置づけられるのである。

この箇所 で用いられている「軽やかな」(levis, 31) という形容詞は、歌い踊るニンフの軽やかな性質を表すのみならず、詩のジャンルをも含意しているだろう。「重い詩」と言われる叙事詩と対比的に、抒情詩は「軽やかな詩」とみなされる²¹。そして行頭に置かれることで強調される「エウテルペ」(33) は詩のジャンルをはっきりと提示する役割を担っている。エウテルペはムーサの一人で抒情詩を司る。同じ行の末尾に置かれた「ポリュヒュムニア」(33) もまた、ムーサたちの一人で、堅琴を発明した賛歌の女神である。また「レスボス島の堅琴」(Lesboum barbiton, 34) は、サッポールの抒情詩を示している。このように、詩人は詩のジャンルを示すとともに、サテュロスやニンフ、ムーサたちと交わりを持ちながら詩作する喜びを語るなのである²²。

また、ニンフの「歌舞」(chori, 31) やエウテルペの「笛」(tibia, 32) やサッポールの「堅琴」(lyricis, 35) は、兵士 (⑦) が好む「角笛」(lituo, 23) や「ラツパ」(tubac, 23) と対比される。騎兵の角笛や歩兵のラツパは、母親たちが憎む戦場の音を表すものであった。そのような戦場の音とはかけ離れた歌舞やエウテルペの笛や堅琴を、詩人は喜びとする。音の対比は戦いを好む生き方と平和を愛する生き方の差異を際立たせるとともに、詩人の態度を明示するものとなる。

¹⁸ ホメロスやヘシオドスからつづく詩作と詩神の関係にもとづく。

¹⁹ Race, p.122 は、詩人と戦車競走選手の目的(「神々にまで高められる」と「天上の神々と交わる」)が似ているものの、「学識」の点で両者は異なると主張する。本稿は、学識が両者を隔てるという観点について重要な示唆であると同意する一方で、両者の目的については表現が似ているからこそ差異があると考え。

²⁰ たとえば, *senatus populusque Romanus* 「元老院とローマの民衆」が正式なローマの構成員を示すように、*Quiritium* はローマ市民を表す。

²¹ 河島 (2017) pp. 11-13; cf. Hor. *Carm.* 2.1.37-40.

²² 抒情詩という詩のジャンルとの関係はこのほかにもみられる。たとえば職業のカタログの最初に戦車競走選手が語られることはピンドロスとの関連を有するし、サッポールやピンドロスなど抒情詩に用いられることの多いプリアメルを第1歌に用いていることも意識的であろう。

また、兵士 (⑦) と狩人 (⑧) が密接に結びつくものであることは、詩的構造によって示されていた。兵士と同じように、狩人は閑暇に反する危険で好戦的な生き方を求める存在であった。狩人の生き方もまた詩人と相反するものとみなすことができる。その差異は両者の描写からうかがい知ることができる。

まず、詩人が「林」(nemus, 30) で過ごすように、狩人もまた鹿や猪が生きる林や森で狩りをするために、両者の情景は類似しているように思われる。そのうえで、狩人が林にとどまるふたつの条件が最後の2行で示されている (scu ... / scu ..., 27-28)。鹿をとらえることができるような機会や猪が網を破るような危機があれば狩人はとどまることを選ぶ。他方で、詩人が林で詩作に取り掛かる条件もまたふたつ提示されている (si necque ... / nec ... , 32-34)。詩人は女神が妨げることなく助力してくれるならば、林にとどまることができる。ただし、狩人がとどまることは、妻を悲しませる結果を招いてしまった。それに対して、詩人が林にとどまることは、女神たちと交歓を持つことを意味する。似た構造を有することで、両者の対比が明示されている。

また、狩人が「冷たい空 (ユピテル) のした」(sub love frigido, 25) にとどまる情景は、「涼しい林」で過ごす詩人の姿と対比される。「冷たい空のした」という表現には、一般的に狩りの季節とされる秋から冬が含意される²³。それに対して、「涼しい林」には夏の情景が意図されている²⁴。たとえばウェルギリウスの『牧歌』において明示されるように、牧人は夏の暑い日差しを避けるために、林の木陰で涼を得る。そして、その暑さを避けて木陰で過ごす閑暇のときに、牧歌をうたう。このような情景が牧歌的な詩作の情景とみなされている²⁵。狩りに夢中になって危険で辛い状況にとどまろうとする狩人に対して、詩人は酒好きの人がのんびりと閑暇を楽しむように、林で涼みながら抒情詩を奏でるのである。

4. 抒情詩人 (lyricus vates)

以上のように、プリアメルにおける引き立て役と主題は並列に置かれるのではなく、明確に対比されている。詩人とは相反する生き方が語られる場合もあれば、親和性をもって表現される生き方もある。では、詩人の生き方は類似性の多い農夫や酒好きと同じ性質のもの、並列の喜びと言えるだろうか。たしかに生き方の性質は近いかもしれない。しかし、「神々と交わる」という観点において、詩人と他の人々の決定的な違いがある。世俗から離れるとはたんに浮世離れすることを意味していない。人の領域から離れて神々の領域に触れることを表している。このことは、最後の2行の描写 (35-36) に明示

²³ Mayer, p.58.

²⁴ Mayer, p.59.

²⁵ 河島 (2013) pp.120-21.

される。

quod si me lyricis vatibus inseres,
sublimi feriam sidera vertice.

そしてもしもあなたが私のことを、抒情詩人に加えてくださるなら、
私は高くもたげた頭で星々を打つことになるだろう。

1-2 行のマエケナスへの呼びかけと対となり、詩を締めくくる部分である。Musurillo, p.230 は 1-2 行と 35-36 行を、詩の中心 (3-34 行) から完全に切り離すことができる部分であると論じており、他の研究者においてもおおむねその理解が踏襲されている。詩的構造の点ではその理解は正しいが、内容においては完全に切り離されているというよりも、むしろプリアメルに続き、その仕上げとして詩人の最大の喜びが語られると考えることができるだろう。

詩人ホラティウスのことを、もしもマエケナスがギリシアからつづく過去の偉大な抒情詩人のひとりに加えてくれるなら、「私は高くもたげた頭で星々を打つことになるだろう」(sublimi feriam sidera vertice, 36) という。これは大喜びをすることを示すギリシアの格言的な言い回しを応用した表現である。だが同時に、この詩句はオリュンピアの戦車競走選手の喜びを表した「地上の覇者として神々にまで高められる」(terrarum dominos evehit ad deos, 6) という比喩と対応する。選手は神々に高められてもやはり地上にいる。それに対して、世俗から離れ、神々と交わりを持つ詩人が天に近づくという表現には、格言的な言い回し以上の意味が込められるだろう。それは、詩人が高い空から見渡す光景であり、抒情詩人 (lyricis vatibus, 36) が射程とする視野を示している。

抒情詩人を表す lyricus (lyricis) はギリシア語からの借用語であり、伝統的な詩とそのジャンルを示している。一方で vates (vatibus) はアウグストゥス時代の詩人たちが特別な存在であることを自負して用いた言葉であり、古くからあるラティウム²⁶の要素を思い起こさせる。ラテン語で一般的に「詩人」は poeta と呼ばれるが、vates はもともと「予言者」を表す言葉であったために「予言詩人」と訳しうるような、特別な詩人である。vates がどのような性質の詩人を示しているかについては、さまざまな意見がある。この言葉を用いている詩人やその文脈によっても異なるかもしれないが、詩神の加護を授かりながら社会的な視点を有していることについてはおおむね同意されるだろう²⁷。

²⁶ Nisbet, p.3. また Dunn, pp.177ff. は 1.1 理解のために lyricus vates に着目している。

²⁷ Cf. 日向, p.161.

詩神の助力を得ていることは、神々と交わりを持ち、エウテルペやポリュヒュムニアがそばにいることなどから明瞭であろう。また公職を求める政治家をはじめ、農場経営者や貿易商などを取り上げるという社会的観点をも包含している。また兵士や狩人が母親を悲しませるような描写、閑暇を楽しむ酒好きや質素な農夫の生き方を肯定する姿勢は、社会を表現の対象とする以上に、新たな価値観を提示している。古代ローマにおいて予言者 *vates* は宗教的な役割を有すると同時に、社会的に重要な存在だった。このことは、予言詩人 *vates* が同じように宗教的・社会的意義を有することと無関係ではないだろう。詩神の助力を得て社会を導くような詩をうたうという自負を「*vates*」という名称に込めている。

このように *vates* の視座が提示されることについては、第1歌で取り上げるカタログと『カルミナ』全体の主題との関連からも、その意味をうかがい知ることができる。Fraenkelは第1巻第1歌は全3巻がほとんど完成してから作られたと主張しており、他の研究者によっても同意されている。それは、第1歌に含まれる題材が他の歌でふたたび扱われ、意図的に関連づけられているからだ²⁸。たとえば、第1歌で扱われるさまざまな人々、すなわち政治的な指導者層や裕福な商人から農夫や酒飲みなどの庶民にいたる人々は、『カルミナ』のなかでしばしば取り上げられる。多様な社会階層に属する人々の生き方は、詩人の関心のうちに位置づけられる。

また詩人の視野は地理的な広がりを持つ。都市(②③)、田園(④)、海(④⑤)、山(⑧)、空(①⑨)、あるいは市民の楽しみとなる競技場(①)、哀しみの場となる戦場(⑦)、そして神々と交わる詩作の場(⑨)などの多様な情景が描かれる。さらに抽象的な情景にとどまらず、ローマ(②)、イタリア(⑥⑧)、ギリシア(①⑨)、ペルガモン(④)、キプロス(④)、リビア(③)など、固有の地名を想起させる記述も含まれている。地中海を取り巻く広大な地域を手に入れたローマにふさわしく、*vates* の視座は首都ローマを超えて広がりを持つ。『カルミナ』をうたう *lyricus vates* の視座は神々と人間を含む世界全体を見渡すような広さを有し、そこに暮らす多様な人々の生き方に目が向けられているのである。

おわりに

本稿は『カルミナ』第1巻第1歌に含まれるプリアメルを詳細に分析した。職業のカタログに描かれる人々の喜びや生き方がたんに並列されるのではなく、従来の解釈以上に互いに密接な連関を有しながら多様な観点や価値観を提示していた。その複層的な結びつきが、*lyricus vates* と呼ばれる「抒情詩人」の性質を浮き彫りにしている。*lyricus vates*

²⁸ Fraenkel, p.230; Günther, p.231.

と称される抒情詩人は、人々の生き方とは一線を画す存在であり、人々の営みを眺望する視座を有していることが明らかになった。

第1歌に関する従来の解釈は、抒情詩 (lyricus) という側面に強く着目する一方で、予言詩人 (vates) にはあまり注意を払っていない。しかし、本稿が明らかにしたように、第1歌においては詩人が vates と表現されている点が極めて重要であろう。伝統的な抒情詩 lyricus をローマの予言詩人 vates がうたう。ギリシアの文学伝統を受け継いで模倣し、ラテン文学に導入するだけでなく、ローマが持つべき新たな視座のもとで奏でられることを意味しているのである。

世俗から離れて神話的情景に身を置く vates の生き方は、民衆的な生を無視することを意味してはいない。むしろ社会から距離をとり神々と交わりを持つことで、はじめて世界のすみずみまで見渡すことができる視座を、自己を顧みる客観的な視点を、他者のまなざしを獲得することができる。その視座をもって lyricus vates は軽やかな調べでローマの民衆や社会を描こうとする。第1歌は『カルミナ』の序歌として、抒情詩人の生き方を示すのみならず、抒情詩を語る予言詩人 (lyricus vates) の存在を定義づけ、その視座を提示しているのである²⁹。

原典

Shackleton Bailey, D R. 2008. *Q. Horatius Flaccus: Opera*. Walter de Gruyter.

参考文献

- 岩崎務, 1988「ホラティウス c.4.8 と c.4.9: 詩歌と美徳(その1)」『西洋古典論集』5: 59-70.
河島思朗, 2013「ウェルギリウス『牧歌』に描かれる牧歌世界の危機」『パストラルー牧歌の源流と展開』川島重成・古澤ゆう子・茅野友子編, ピナケス出版, 121-150
——, 2017「オウィディウス『変身物語』における叙事詩と非叙事詩の混交 ——序歌, オルペウスの物語, アラクネーの織物——」『地中海学研究』40: 5-25
日向太郎, 2021「アウグストゥスと詩人たち」『古典の挑戦』知泉書簡, 159-92.

Dunn, Francis M. 1989. “Horace’s Sacred Spring (Ode, I. 1).” *Latomus* 48(1): 97-109.

Fantham, Elaine. 2004. *The Roman World of Cicero’s De Oratore*. Oxford University Press.

Fordyce, C. J., and Gaius Valerius Catullus. 1990. *Catullus: A Commentary*. Oxford University Press.

²⁹ 本研究の成果の一部はJSPS 科研費 18K00486 および21K00415 の助成を受けたものです。

- Günther, Hans-Christian. 2013. "The First Collection of Odes: Carmina I–III." In *Brill's Companion to Horace*, Brill, 211-406.
- Hanchey, D A N. 2013. "'Otium' as Civic and Personal Stability in Cicero's Dialogues." *The Classical World* 106(2): 171-97.
- Harrison, S. J. 2007. *The Cambridge Companion to Horace*. Cambridge University Press.
- Hutchinson, G O. 2002. "The Publication and Individuality of Horace's *Odes* Books 1-3." *CQ* 52(2): 517-37.
- Mayer, R. 2012. *Horace Odes, Book I*. Cambridge University Press.
- Musurillo, Herbert. 1962. "The Poet's Apotheosis: Horace, *Odes* 1.1." *Transactions and Proceedings of the American Philological Association* 93: 230-39.
- Nisbet, R. G. M., and Margaret Hubbard. 1970. *A Commentary on Horace: Odes, Book 1*. Clarendon Press.
- Race, William H. 1982. *The Classical Priamel from Homer to Boethius*. Brill.
- Shey, H James. 1971. "The Poet's Progress: Horace, Ode 1.1." *Arethusa* 4(2): 185-96.
- West, David. 1995. *Horace Odes I: Carpe Diem*. Oxford University Press.